



▲復元された千田堤

## 千田堤 ～江戸時代の治水技術～

山本ふれあい公園の入口付近に見える石積み。これは、寛文年間(1661～1672)頃に千田数馬興義かずまおきよしという人物が造ったと伝えられる堤防を復元したもので、その名をとって「千田堤」と呼ばれています。千田数馬は寛永3年(1626)大野村おののに生まれ、はじめは高松藩主の生駒高俊いごまたかとしに仕え、その改易後は丸亀藩主京極高利きょうごくたかかず・高豊父子たかとよの重臣となりました。その優れた政治手腕は、生駒氏の後に高松藩主となった松平頼重よりしげにも賞賛されたと言われています。

さて、千田堤は長さ600m、幅6m、高さ1.3mの堤防です。この堤防は両岸を平均30cmほどの石で築き、内部には砂や礫つぶてをつめています。この石材間の隙間

が水の通り道となり、徐々に水がしみ出る構造となっていました。これはただ洪水をせき止めるのではなく、水を逃がすことで水勢を緩和することを目的とした造りと言えます。当時、洪水が発生すると、村々の田畑・家屋だけでなく人命も多く失われました。そのことは治水技術が進んだ現在でも、各地で地震や台風などで大きな被害が出ていることをみても明らかです。

千田数馬は堤だけでなく、池や用水路の造成、大野の八幡宮・祇園宮の本殿等の建立(両社の縁起書『大埜村両社記(市有形文化財)』にもその名が記されています)馬場の整備など、その生涯は郷土への愛情に満ちていました。千田数馬の名は堤とともに永く残ることでしょう。

<生涯学習課>

## 今月の市民力

平成20年3月の新聞記事に、多度津桃陵公園の「一太郎やーい」像の制作者について誤りがあり、地元の田井弘さんの指摘で朱越氏の作品であることが判明しました。

このようなことがきっかけで、朱越作品の価値を後世の人たちに伝えたいと、朱越氏を知る地元有志が中心となって「織田朱越翁を顕彰する会」を発足したそうです。

「先人の業績を後世に伝えたい」という思いだけで、献身的に活動を続ける顕彰会の皆さん。作品展示会や作品集の発刊は、まさにその市民力によるものだったと思います。

